

機関番号：14101
 研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2008～2010
 課題番号：20330182
 研究課題名（和文）デマンドサイドのニーズに即した教科領域を超えた教材開発と評価方法の研究
 研究課題名（英文）Development of teaching material exceeded the curriculum region and research of the evaluation method which matches requirement for the demand side.
 研究代表者
 松本 金矢（KIN' YA MATSUMOTO）
 三重大学・教育学部・教授
 研究者番号：10239098

研究成果の概要（和文）：

先行研究や実践活動で実績のある拠点校（5校区）を中心に、教育現場や隣接領域の実践現場のニーズを調査し、それに応じた領域を超えた教材・活動を開発・展開した。開発した教材は、現場との協働において教育実践に活用された。その実践報告を基に公開研究会を開催し、その有効性が検討された。得られた成果は、学会発表（33件）・論文発表（36件）として公開され、関係研究者の評価を得た。

研究成果の概要（英文）：

The requirement for education fields and practice fields in the adjoining region was investigated, mainly in the 5 base schools with results in precedence researches and practice activities. Teaching materials and activities which exceeded the curriculum region it were developed based on the requirement. Developed teaching material was utilized for the education practice in the co-operation with people in the field. The open workshop was held on the basis of the practice report, and the effectiveness was examined. The results of this research were reported as 33 papers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,100,000	1,530,000	6,630,000
2009年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総計	8,600,000	2,580,000	11,180,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教材開発、PBL教育、moodle、教育実践、評価法

1. 研究開始当初の背景

2006～2007年度にわたって、科学研究費基盤研究(B)の助成を受け、『教員養成型PBLチュートリアル教育のためのシステムおよび評価法の開発』をテーマとし、教員養成学部におけるPBL(Problem Based Learning/Project Based Learning)教育のあり方について研究を進めてきた。そこでは、教員養成の各領域における実践活動の展開と教育コ

ンテンツの開発、さらにはPBL教育における評価方法の研究に注力し、成果を上げてきた。例えば、教育現場での問題発見・解決型学習により、学生達が能動的に学ぼうとする姿勢が養われることが明かとなり、またPA(パフォーマンスアセスメント)を用いた新たな評価方法を開発することができた。

しかしながら、PAによる評価方法の開発においても、人と人との関係性に関する研究

は発展したが、人と材との関わりについての研究は十分とは言えず、特に教育隣接関連領域における教材開発に特化した研究が必要であった。

教育学部においては、教材を開発することが一つの重要な研究目的となっており、これまで教科ごとの教材開発が進められてきた。しかし従来の大学と教育実践現場との関係は、知識とその応用という関係性が主であって、大学側の教材開発もあくまでも実験的なものを現場で検証する、あるいは検証されたものを提供するという一方的な関係であった。したがって、これまでの教材開発の多くが研究者サイドの発想に基づいており、必ずしもデマンドサイドのニーズに対応しないことが問題となっている。そこには現場の固有性や対象との相互作用という教育の本質的な問題が関わっている。また、学習指導要領の改変や学習時間数の変化、2学期制の導入、特色ある学校運営の奨励など、社会的な変化に対応した教材・活動の開発が急務となっている。

2. 研究の目的

本研究の目標は、次の2点にある。

- ・教育実践現場のニーズに合った教材の開発
- ・教材の評価法の研究

我々は PBL 教育の実践を通して、様々な教育周辺領域の実践現場と、長期的・継続的な協働関係を築き上げてきた。それら教育実践現場から求められる教材や活動を開発し、データベース化して社会に発信する。ここでは教材を立案するというだけでなく、現場に存在する問題発見の段階から関わるのが重要となる。したがって、継続的な授業観察による問題点の検討や、教育現場との情報交換の方法を確立することも研究対象とする。開発で終わるのではなく、現場との絶えざる「対話」によってより効果的な使いやすい教材にしていくことも重要な課題であると考えている。

教材の評価方法については、開発した教材を用いて実践を行い、その成果を確かめる方法を研究する。そこには、教育現場での実践と大学の理論研究の往還が必要であり、そのためのシステムを確立することも視野に入れている。

3. 研究の方法

本研究では、これまでに連携協力を行っている様々な教育機関に対して、教材開発のための協働研究を依頼し、moodle (Modular Object Oriented Dynamic Learning Environment) を活用した教育問題解決支援ネットワークを構築する。ネットワークを通して集められた課題に対して、学部生・大学院生および現場関係者と連携してチームプ

ロジェクト研究を立ち上げる。プロジェクトにより開発され教材(活動)を現場で実践し、その成果を評価・検証するための手法を開発する。研究成果は教育実践研究論文としてまとめ、学会等を通して発信するとともに、学内においてシンポジウムを開催し、学内外の研究者・教育関係者および学部生・大学院生と共有する。開発された教材は、事例研究データベースとして蓄積し、連携協力機関との間だけでなく、広く社会に対して公開する。

第1のタイプは、専門領域を超えた協働による領域横断型の教材開発である。例として、音楽と技術との協働による『手作り有音程打楽器の開発』があげられる。これはウィリアムズ症候群の子ども達とその家族を対象とした芸術プログラムにおいて、音楽科学生が考案した音楽セッションの実践とそれに用いる手作り楽器の製作実践を組み合わせたものである。音楽の授業における楽器作りについてはこれまでもいくつかの報告例があるが、いずれも製作技術上の制約から、マラカス等の単純なものがほとんどである。本研究では、音楽と技術それぞれの教科の専門性を活かし、実践者の意図や対象者の技能にあわせた教材開発を実現した。

また、家政と技術の協働による『ソーラークッカーの製作』も複合領域に跨る教材開発の例である。『総合演習』において、中学校家庭科でのソーラークッカー製作実践を模擬した PBL 形式の授業を展開し、技術教育の4年生および教員がチューターとして参加した。設計から試作、温度測定実験に至る技術科的なアプローチと、低カロリーで調理できる食材の組み合わせなどの家庭科的なアプローチを組み合わせることによって、これまでにない付加価値の高い教材開発を実現したものである。

教育実践現場の特性に対応した地域連携型の教材・活動の開発も必要となる。これが第2のタイプである。S市との連携による『教育実地研究』では、過疎化が進行する地域の要請を受け、保育園、小学校、中学校において、大学生が考えた子ども達のコミュニケーション能力の育成を目指した授業実践活動を展開している。

また、K市の小規模特認校における特色ある学校運営の支援として、感性を涵養する授業実践の依頼を受け、理科の電気分野の授業実践を通しての教材開発を行った。複式学級の授業や学校と地域との連携行事等の継続的な参与観察を行い、moodle を使った記録の蓄積・交流と問題の所在の明確化、そして現場への問題提起と意見の交換を行っている。この例は長年に渡り学校現場との信頼関係を築き上げた結果、大学側の授業実践が受け入れられるようになったもので、教育現場の特色にあわせた、まさにデマンドサイドの

ニーズに応じた教材開発の例である。

第3には、教材の有効性の評価法開発をねらった研究である。『わくわくコミュニケーションクラブ』はその代表的な例であり、学生が週に一度の割合で検討会を開催し、教育実践活動案を作成しながら、moodle を活用して学校、地域社会からのデマンドに応じた教育実践を行っている。そこで、PA を用いた評価方法の開発を行っている。

4. 研究成果

2008年度は、PBL 教育研究を通して連携を深めてきた教育現場と協働し、参与観察、授業実践、活動支援などの実践を継続するとともに、それぞれのデマンドサイドの課題に即した教材開発を行った。具体的には、K市S小学校での授業実践やT市I地区における活動、H地区の合同文化祭、S市K地区での学生開発型授業実践などである。特に、長野県で開催した芸術プログラムにおいては、本学と大学間協定を結ぶ天津師範大学の講師を招聘し、音楽・舞踊・書道などの芸術交流を実施し、言語を超えた活動の開発を行った。また、研究拠点校として6カ所（T市I中学校、T市K小学校、K市S小学校、S市K小学校、S市K中学校、天津師範大学）を設定し、拠点校用のノートパソコンを設置した。これを利用して、学内サーバーにある moodle にアクセスし、教材開発のためのネットワークを構築した。一方、3月には天津師範大学の協力により、中国の幼小中高の授業を視察した。これにより、日本における教育と中国における教育の比較を行った。さらに、教材開発に関する国際会議 NSTA（全米科学教育連合会）大会に出席し、海外の動向調査を行った。また、教材の有効性に関する評価法の開発にも着手した。

2009年度も引き続き、拠点校等と協力し、参与観察、授業実践、活動支援などの実践を行い、教材開発を推進した。芸術プログラムでは打楽器カフオンを取り上げ、様々な芸術活動を創出した。楽器製作の技術的な側面だけでなく、固有性を育む美術活動や、楽器の特性を活かした音楽表現の工夫など、学生との協働により教材の開発を進め、その成果を本学で開催された『科学の祭典』においても応用した。『科学の祭典』に並行して行われた『サイエンス on ステージ』では、「科学の歌」の制作を行い、子ども達を対象に実践を行った。小学校校歌や幼稚園・小学校での飼育動物の歌を制作、活動を展開した。また、伊賀市の小学生を対象に料理教室を用いた食教育の実践を行い、調理技術・知識・食生活についての変容を観察し、津市内の小学校における実態調査の結果との比較研究を行った。現職教諭である大学院生とともに、調理実習を核としたカリキュラム開発・授業案作成も

行った。教育方法に関する研究では、外部講師を招いて協同学習に関する公開勉強会を開催した。小中学校理科の生物分野における「動物の体のつくり」で活用できる教具として、動物の透明解剖模型の考案・作製を進めるとともに市販品との比較調査を行い、本学部の授業および三重県教育委員会の教員研修で実践した。幼稚園との連携において、飼育動物に関する歌づくりや書道活動の記録・分析を行った。一方、海外の教育事情に関する調査研究では、本年度はタイに出向き、学生とともに学校現場の視察や授業観察を行った。

データベースの活用については、三重県内栄養教諭の情報交換サイトを立ち上げ、moodle を利用した現場との情報交換を開始した。

研究成果の発信に関しては、本プロジェクト研究会において教科専門における教員養成型 PBL 教育について検討を行い、大阪教育大学の FD 研修会での招待講演においてその成果を報告した。また、京都大学で開催された大学教育研究フォーラムにおいて、学生の学びの履歴の重要性に関する研究報告を行った。さらに、学生の研究成果の一部は、本学で開催されたアカデミック・フェアや一身田フォーラムを通して発表され、他の研究プロジェクトとの交流を行った。

2010年度は、これまでに推進してきた教材開発研究の成果を発信するために、定期的に公開研究会を開催した。食教育に関する研究では、従来型の単発的な調理実習を行うカリキュラムを改善し、ローテーションによる2回の調理実習を組み合わせた新しいカリキュラムを提案した。その有効性を検証するために、試験に加え検定や意識調査による評価方法を用いている。

また、領域を超えた教材開発では、幼稚園における飼育動物に関する教材を研究した。飼育動物についての歌を大学生が園児と関わりながらつくるという実践である。飼育動物の生物学的な視点と歌づくりに関する音楽科の専門性、また園児の表現に関する幼児教育の領域とのコラボレーションである。教育者の体験・経験を越えた多角的な視点が、園児の体験の機会を豊かにし、文化や教養を培う基礎に関わることが明らかとなった。音楽と技術との協働による教材開発では、打楽器カフオンに焦点を当て、ものづくりと演奏を組み合わせた芸術活動を研究した。材料特性と音響特性の関係を、機械工学的アプローチから解明し、楽器の特性を評価することで、その特徴を活かした演奏活動を展開することが可能となった。

学年や校種を超えた教材の開発に関しては、異学年グループによる物語の創造教材を提案した。提案した教材を学年や校種、地域

の異なる学習者に対して実践した結果、教材としての要件や評価方法についても明らかにすることができた。教材評価法に関する研究では、PBL 教育の学習動機付けや学習スキルに対する有効性を、講義型授業との比較研究により明かにした。

研究で得られた成果は、日本教育大学協会研究集会、教育 GP フォーラム等を通して発信し、関係研究者から評価を受けた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 36 件)

1. 中学校技術・家庭科におけるエネルギー変換に関する教材の提案、松本金矢・中西康雅、『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、査読無、Vol.30、pp.53-57、(2011)
2. 教育における感性の今日的課題、根津知佳子、『日本感性工学会学会誌』、査読無、Vol.10、No.1、pp.27-30、(2011)
3. 発達障害のある児童のキャンプ体験、滝口圭子・寺田容子・今塩屋優美・武澤友広・近藤武夫・磯部美良・落合俊郎、『広島大学教育学部幼年教育研究年報』、査読有、Vol.33、印刷中、(2011)
4. 教育学部学生の子ども観は所属コースにより異なるのか、滝口圭子、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.62、pp.283-292、(2011)
5. 幼稚園におけるウサギとの生活に関する実践的考察、滝口圭子・根津知佳子・後藤太一郎、『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、査読無、Vol.30、pp.7-12、(2011)
6. 小学生の調理技術と食生活、磯部由香・早川巳貴・平島円、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.62、pp.69-73、(2011)
7. 料理習得に対する高校までの調理実習の影響、堀光代・平島円・磯部由香・長野宏子、『岐阜市立女子短期大学研究紀要』、査読無、Vol.60、p55-59、(2011)
8. 食物栄養および家政教育専攻学生の調理意識と技術の現状、堀光代・平島円・磯部由香・長野宏子、『岐阜市立女子短期大学研究紀要』、査読無、Vol.59、pp.85-89、(2010)
9. CS 分析を利用した授業の評価と改善、南学・中西良文、『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、査読無、Vol.30、pp.39-43、(2010)
10. 大学教育目標の達成を目指す全学的初年次教育の導入、中山留美子・長濱文与・中島誠・中西良文・南学、京都大学高等教育研究、査読有、Vol.16、pp.37-48、(2010)
11. 音楽療法と感性工学の接合、根津知佳子、『日本感性工学会論文集』、査読無、Vol.9、No.1、pp.86-91、(2010)
12. エピソード記録の重ね合わせの可能性、高林朋世・根津知佳子・森脇健夫、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.61、

pp.305-317、(2010)

13. 教室の感性、根津知佳子、『感性とフィールド』、査読有、東信堂、pp.125-138、(2010)
14. 野外活動施設における魚類の解剖学習、片山典子・後藤太一郎、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.61、pp.7-11、(2010)
15. 文章理解における具体的状況描写のしやすさと言語性ワーキングメモリ及び空間ワーキングメモリとの関連性、滝口圭子、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.61、pp.333-341、(2010)
16. 高等教育におけるクリティカル・シンキング、武田明典・村瀬公胤・中西良文・石岡克俊・山口美和、『神田外語大学紀要』、査読無、Vol.22、pp.363-383、(2010)
17. 英語否定疑問文への回答における概念変化と動機づけの促進、中西良文・村井一彦・梅本貴豊・古結亜希、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.61、pp.299-303、(2010)
18. 小学生のコミュニケーション能力に対する Performance Assessment (3)、廣岡雅子・秋山美和・奥村元美・古結亜希・横矢祥代・中西良文、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.61、pp.139-144、(2010)
19. 教員養成型 PBL 教育の課題と展望 V、根津知佳子・森脇健夫・中西康雅・松本金矢・高林朋世・前原裕樹・伊藤亜季、『第 16 回大学教育研究フォーラム発表論文集』、査読無、pp.116-117、(2010)
20. 未就園児保育の運営に携わる学生の意識の推移、滝口圭子、『日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集』、査読無、p.754、(2010)
21. 「ものづくり」から「物語」へ、松本金矢、『感性哲学 9』、査読無、pp.52-68、(2009)
22. エピソード記録の重ね合わせの可能性、高林朋世・根津知佳子・森脇健夫、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.60、pp.305-317、(2009)
23. 認定こども園(総合施設)モデル事業園の保護者及び保育者は運営の移行をどのようにとらえているのか、滝口圭子・田中利絵、『幼年教育研究年報』、査読有、Vol.31、pp.69-76、(2009)
24. 理科授業における動機づけ機能を組み込んだ教授方略の効果、高垣マユミ・田爪宏二・中西良文・波巖・佐々木昭弘、『教育心理学研究』、査読有、Vol.57、pp.223-236、(2009)
25. 技術科教育における知的財産学習のための意識尺度の構成、村松浩幸・宋慧・松岡守・中西良文・森山潤、『日本産業技術教育学会誌』、査読有、Vol.51、pp.17-24、(2009)
26. 授業研究としての「アクションリサーチ」の試み II、森脇健夫・根津知佳子・小幡肇、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.60、pp.287-302、(2009)
27. 学生開発型のものづくり授業実践におけ

る「対話」の研究、根津知佳子・前原裕樹・松本金矢・中西良文、『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、査読無、Vol.29、pp.39-45、(2009)

28. 中学校の家庭科担当教員による食に関する指導についての意識と実態、磯部由香・村上陽子・長野宏子、『三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』、査読無、Vol.29、pp.75-78、(2009)

29. 中国の小学校における身近な小動物を用いた「動物の体のつくり」に関する授業実践、王雪松・後藤太一郎、『三重大学教育学部研究紀要』、査読無、Vol.60、pp.1-6、(2009)

30. 特別支援教育のハンドブックの使いやすさを高める要因とその充足の効果の検討、寺田容子・滝口圭子・武澤友広・落合俊郎、『LD研究』、査読有、Vol.17、pp.191-200、(2009)

31. 教員養成型 PBL 教育の課題と展望Ⅳ、中西良文・根津知佳子・松本金矢、『第 15 回大学教育研究フォーラム発表論文集』、査読無、pp.78-79、(2009)

32. 継がれる感性、根津知佳子、『感性哲学 8』、査読無、東信堂、pp.37-44、(2008)

33. 教育実践における感性のフレームワーク、根津知佳子・松本金矢、『日本感性工学会論文誌』、査読有、Vol.8、No.1、pp.73-88、(2008)

34. 心と音楽こころの鏡、根津知佳子、『音楽文化創造』、査読無、Vol.50、pp.16-19、(2008)

35. “感じる力”を培う教育実地研究、根津知佳子・森脇健夫、『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、査読無、Vol.16、pp.21-25、(2008)

36. 教育学部学生が実地研究において学生開発型授業を実践することの効果、伊藤由恵・中西良文・根津知佳子・松本金矢、『大学教育研究-三重大学授業研究交流誌-』、査読無、Vol.16、pp.27-31、(2008)

[学会発表] (計 33 件)

1. 破壊形態を考慮した強度設計に関する中学校技術教材の開発、宇佐見聡之・中西康雅・松本金矢、第 28 回日本産業技術教育学会東海支部大会、(2010.12.4)、愛知教育大学

2. 中学校における調理実習の課題解決に向けた授業の提案、前田紀男・磯部由香・平島円・吉本敏子、日本家庭科教育学会 2010(平成 22)年度例会、(2010.11.27)、聖心女子大学

3. 大学における発達障害学生への多様な支援の在り方、西村優紀美・滝口圭子・森定玲子・田中和代・高橋知音・吉永崇史・斎藤清二・上野一彦、日本 LD 学会第 19 回大会、(2010.10.11)、愛知県立大学

4. 発達障害の児童生徒に対する親の会との協働による短期型キャリア教育プログラムの実践Ⅱ、宮本昌子・寺田容子・滝口圭子・五里江陽子・松為信雄、日本 LD 学会第 19 回大会、(2010.10.10)、愛知県立大学

5. 発達障害の児童生徒に対する親の会との協

働による短期型キャリア教育プログラムの実践Ⅰ、滝口圭子・寺田容子・宮本昌子・五里江陽子・松為信雄、日本 LD 学会第 19 回大会、(2010.10.10)、愛知県立大学

6. 幼児のテキスト理解における言語性ワーキングメモリと視空間ワーキングメモリの影響、滝口圭子、日本認知科学会第 27 回大会、(2010.9.17)、神戸大学

7. 未就園児保育の運営に携わる学生の意識の推移、滝口圭子、日本教育心理学会第 52 回総会、(2010.8.29)、早稲田大学

8. 学校教育における調理実習経験が及ぼす料理習得効果、平島円・堀光代・磯部由香・長野宏子、日本調理科学会平成 22 年度大会、(2010.8.28)、中村学園大学

9. 料理教室を通じた食教育の実践、磯部由香・早川巴貴・平島円・中井恵子・中井茂平、日本調理科学会平成 22 年度大会、(2010.8.28)、中村学園大学

10. 保育者養成の今、滝口圭子・倉盛美穂子・田爪宏二・横山真貴子・中澤潤・秋田喜代美、日本教育心理学会第 52 回総会、(2010.8.27)、早稲田大学

11. 方略保有感の促進を目指した授業実践とその効果、梅本貴豊・中西良文、日本教育心理学会第 52 回総会、(2010.8.27)、早稲田大学

12. 図の比較課題を通じた分数の学習と動機づけ変化、中西良文、日本教育心理学会第 52 回総会、(2010.8.27)、早稲田大学

13. 透明鱗をもった魚種の教材化、後藤太一郎・中泉久子・淀大我、日本理科教育学会、(2010.8.7)、山梨大学

14. The effects of problem-based learning in terms of the students' learning strategies and motivation, Yoshifumi Nakanishi, Temasek Polytechnic's International Conference on Learning and Teaching, (2010.6.9), Singapore

15. 学生の調理技術の把握、平島円・堀光代・磯部由香・長野宏子、日本家政学会第 62 回大会、(2010.5.29)、広島大学

16. 大学教育を通じた大学教育目標への学生の認識の変化、中西良文・南学、第 16 回大学教育研究フォーラム、(2010.3.19)、京都大学

17. 教員養成型 PBL 教育の課題と展望Ⅴ、根津知佳子・森脇健夫・松本金矢、他 4 名、第 16 回大学教育研究フォーラム、(2010.3.19)、京都大学

18. 授業の評価から学びの評価へ、南学・中西良文、第 16 回大学教育研究フォーラム、(2010.3.18)、京都大学

19. 発達障害のある中学生の就労を見据えたキャリア教育プログラム、滝口圭子・寺田容子・今塩屋優美、日本 LD 学会第 18 回大会、(2009.10.11)、東京学芸大学

20. 幼児のテキスト理解における言語性ワーキングメモリと空間ワーキングメモリの機

能、滝口圭子、日本教育心理学会第 51 回大会、(2009.9.22)、静岡大学

21. 動機づけ変化を伴う概念変化の試み、中西良文・村井一彦・梅本貴豊・古結亜希、日本教育心理学会第 51 回総会、(2009.9.22)、静岡大学

22. 大学生における CAMI を用いた期待信念の検討、梅本貴豊・中西良文、日本教育心理学会第 51 回総会、(2009.9.21)、静岡大学

23. 教育実践の質的研究の射程とアプローチ、森脇健夫・根津知佳子、第 6 回日本質的心理学会、(2009.9.13)、北海学園大学

24. Moodle 使用の有無と授業満足度との関連、磯和壮太郎・中西良文・南学・奥村晴彦・森尾吉成・野村由司彦、第 11 回 CMS 研究発表会、(2009.5.15)、三重大学

25. 教員養成学部における PBL 教育の意義、根津知佳子・森脇健夫・松本金矢、第 15 回大学教育研究フォーラム、(2009.3.20)、京都大学

26. 教員養成型 PBL 教育の課題と展望Ⅳ、中西良文・松本金矢・根津知佳子、第 15 回大学教育研究フォーラム、(2009.3.20)、京都大学

27. 当事者との対話から考える、就労を見据えた教育のあり方、寺田容子・ソルト(仮名)・滝口圭子・くま(仮名)・宮本昌子、日本 LD 学会第 17 回大会、(2008.11.22)、広島大学

28. 資源リサイクルを取り入れたアルミニウム鋳造教材の提案、谷口将大・松本金矢・中西康雅、第 26 回日本産業技術教育学会東海支部大会、(2008.11.8)、三重大学

29. 白塚幼稚園土曜参観における身体を使った親子のふれあい活動の企画・運営、滝口圭子・西口真梨子・奥山木綿子・辻彰士・中嶋祐太・山崎理沙、日本教育大学協会、(2008.10.25)、三重大学

30. Williams Syndrome の表現行為と感性、根津知佳子、第 40 回日本芸術療法学会、(2008.9.20)、明治大学

31. 公立幼稚園における巡回相談の事例報告、滝口圭子、日本臨床発達心理士会第 4 回全国大会、(2008.8.2)、仙台国際センター

32. 現在の食生活に及ぼす幼少期の食生活の影響、磯部由香・湯川夏子・久保加織、日本家庭科教育学会第 51 回大会、(2008.6.28)、静岡県コンベンションアーツセンター

33. 豊かな人間性の形成に及ぼす食の影響、磯部由香・辻友衣・湯川夏子・平島円・久保加織、日本家政学会第 60 回大会、(2008.5.31)、日本女子大学

[図書] (計 14 件)

1. 『Problem-based Learning の手引きー多様な PBL 授業の展開ー』、中西良文、三重大学版、pp.124-127、(2011)

2. 『「理科教育」ザリガニの生物学』、川井唯史・高畑雅一編、後藤太一郎、北大出版、pp.511-528、(2010)

3. 『ワークブックで学ぶ生物学の基礎』、後藤

太一郎 (監訳)、オーム社、p.295、(2010)

4. 『新・プリマーズ発達心理学』、滝口圭子他 13 名、ミネルヴァ書房、pp.60-72、(2010)

5. 『授業デザインの最前線 II』、中西良文、北大路出版、pp.72-86、(2010)

6. 『教育支援の心理学ー発達と学習の過程ー』、中西良文、福村出版、pp.126-146、(2010)

7. 『教育心理学』、中西良文、ナカニシヤ出版、pp.77-79,82-84、(2010)

8. 『子どもとともにゆう&ゆう』(2011 年 1 月号 通算 663 号)、中西良文、愛知県教育振興会、pp.20-21、(2010)

9. 『保育内容 領域「言葉」一言葉の育ちと広がり求めて』、秋田喜代美・中坪史典・砂上史子・滝口圭子・増田時枝・倉持清美・安見克夫、(株)みらい、160page、(2009)

10. 『児童発達テキスト第 2 部』、田丸敏高・馬場久志・木下孝司・布施光代・滝口圭子・夏堀睦・都筑学 他、福村出版株式会社、240page、(2009)

11. 『子ども学用語集』、小田豊・山崎晃 (監修)、伊藤順子・杉村伸一郎・杉村智子・滝口圭子・田爪宏二・湯澤美紀 他、北大路書房、240page、(2009)

12. 『食の視点 日本人の食生活を考える』、今井勝行・磯部由香、文理閣、pp.112-125、(2009)

13. 『「ザリガニ」身近な動物を使った実験 3』、鈴木範男編、後藤太一郎、三共出版、pp.69-81、(2009)

14. 『小学校課程のための教科教育法音楽編』、根津知佳子、教育芸術社、pp.37-44、(2008)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 金矢 (KIN' YA MATSUMOTO)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：10239098

(2) 研究分担者

森脇 健夫 (TAKEO MORIWAKI)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：20174469

根津 知佳子 (CHIKAKO NEZU)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：40335112

後藤 太一郎 (TAICHIROU GOTO)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：90183813

磯部 由香 (YUKA ISOBE)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：80218544

滝口 圭子 (KEIKO TAKIGUCHI)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：60368793

中西 良文 (YOSHIFUMI NAKANISHI)

三重大学・教育学部・准教授

研究者番号：70351228